

タイトル：2021年度 教育セミナー（第17回）

日時：2021年9月16日（木）～19日（日）

オンライン開催

ポスター発表

「現代中央アジアにおけるイスラーム復興と安全保障—ウズベキスタンを軸とした観点から」

市川 太郎（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 博士一貫課程1年）

今回の「中東☆イスラーム教育セミナー」も、昨年につきオンライン開催となった。思えば2020年からコロナ禍に伴って様々なイベントが、直接対面することなく行われるようになって久しい。オンライン上で会話し、意見を交換することにも慣れてきた。だが、自分にとっては大学院に進学してから初めて学外の方と長い時間を共有し、議論を行う場になったのが今回の教育セミナーである。非常に新鮮で、代えがたい経験となったし、何よりイスラーム研究を通じて同じ年代の方々が集うことで、自分が抱えている研究の悩みは皆抱えているということが分かって安心でき、また切磋琢磨するよい機会となった。以下、今回のセミナーを振り返ってみたいと思う。

まず先生方や受講生の皆さまの発表は、自分にとってはあまり馴染みがない地域について、そして歴史学や現代宗教学など、政治学や国際関係学を中心に据えがちな自分が用いないディシプリンを使ってアプローチされており、非常に勉強になったのは言うまでもない。だが最も自分にとって参考になったのは、受講生発表での質疑応答である。予想だにしていない視点からの質問は、たとえ地域やディシプリンが自分の発表に該当するものでなかったとしても、その観点が自分の研究に備わっているかを再考せざるを得なかった。「最初の問題提起から、研究対象・手法・結論までが一貫しているか？」「単純な二項対立に落とし込んでいないか？」「議論を呼びやすい用語に関して、定義を明確にできているか？」「時代設定は適切か？」など挙げだしたらキリがないが、以上は質疑応答で得られた、いわば「研究進行チェックリスト」に加え入れたい重要な観点である。

次にポスター発表に関して、ポスターの製作から発表後のフィードバックまで、自分にとっては良い刺激になり、また収穫できたものも大きかったことは触れておきたい。まず学内以外での発表が初体験であり、なおかつオンライン上でのポスター発表ということで、製作段階からどの程度分かりやすくすべきか、どの段階から研究を紹介すべきかという点に頭を悩ませることとなった。結果として、完成したポスターは、視認性はよかったものの情報を削りすぎてしまい、口頭発表で補足する割合が多くなってしまった。抽象化も過ぎると漠然としてしまい、研究のストーリーが分かりにくくなってしまうという点は大きく反省すべき点である。もちろんポスター発表後の質疑や指摘は、研究の方針の再考や新たに加えるべき視点に関して、多大に資する貴重な助言となった。もし来年度以降教育セミナーへの参加を考えている方がいれば、どの形式であれ発表することを強くおすすめしたい。自分の研究に様々な観点を吸収させ、大いに進歩できる機会であると考えている。

最後に「情報交換会」などの懇談会で、受講生や先生方のコミュニケーションの輪が広がったことは、特に言及しておきたい。前述の通り、今回はオンライン開催となったが、それは親交を深められないということの意味しなかった。思わぬ人との共通点や、質疑応答の延長戦、勉強法や気になる記事のシェアなどが活発に行われ、やはり研究者同士のコミュニティは意欲を刺激し、興味の範囲を広げることがよく分かった。そしてその繋がりにはセミナーが終わった後も続いており、受講生の方々と議論や情報のシェアを続けることができているのは幸いである。またブレイクアウトルーム機能が導入されたことにより、議論が数人に偏りがちというオンライン形式の障壁を克服できたのも満足できる一つの理由である。

最後に、創意工夫を凝らし、オンライン上でのセミナーというイレギュラーな事態の中で、事務・運営に携わってくださった先生・スタッフの皆様方、そして本当に同年代であるかを疑うほどのハイレベルな発表や議論をしてくださった、受講生の皆さまに感謝申し上げたい。このようなモチベーションを高め、知見を広げ、研究者同士を繋ぐ素晴らしい場が、今後も続くことを願ってやまない。